二〇一四年三月二六日（大阪太閤園 参加者一五名）

東屋を借りて推敲春時雨　小袖
庭ここだ石仏浄土春時雨　〃
扉を閉ざすホテルのチャペル春嵐　〃
抽ん出て庭の要の楠若葉　〃
きらめける万朶の雫木の芽雨　わかば
濡れそぼつ石仏群や木の芽雨　〃
室町の名残の庭に春惜しむ　〃
枯蓮修羅場となりし隠れ池　ぽんこ
築山のなぞへになだれ雪柳　〃
落椿屋根に嵩なす外厠　〃
磐石の凹を埋む春落葉　つくし
対岸に煉瓦の館水の春　〃
灯籠の中に座仏や春の雨　〃
尖塔に銀の十字架木の芽雨　有香
と見こう見屋根に物見や梅雨鴉　〃
雨粒を珠とちりばめ若楓　〃
雨に濡れ風神雷神春寒し　よう子
水亭の玻璃戸に透ける春灯　〃
狂ほしき池の水輪や春の雨　〃
いと小さき祠や庭の春陰に　宏虎
大川の滔々としてビル霞む　〃
白亜なるホテルのチャペル木の芽雨　せいじ
尻ふって仲むつまじき春の鴨　〃
春落葉めいわくさうや雷神像　はく子
雨雫垂れて木の芽に紅兆す　〃
置石の濡れて艶めく春の雨　よし子
鈍色の空にほのかや初桜　菜々
行厨のおこぼれ土筆いかなごと　きづな
雨なれど苑の沈丁よく匂ふ　満天

吟行句会みのる選

二〇一四年三月二六日（大阪太閤園 参加者一五名）